『人文学報』第120号（2023年２月）
（京都大学人文科学研究所）

資料紹介

茨木・千提寺の隠れキリシタン初発見

── 1880年のマラン・プレシ神父の書簡（翻刻・邦訳・解題）──

マルタン・ノゲラ・ラモス*（書簡の邦訳　坂口周輔**）

本論は，Institut de recherche France-Asie（以下IRFA）管下のMissions étrangères de Paris（パリ外国宣教会，以下MEP）の資料館（パリ７区）にある1880年１月20日付の千提寺村の隠れキリシタンについての書簡を翻刻・和訳し，簡潔な解説を付して紹介するものである。この書簡からわかるのは，これらの関西の隠れキリシタンが発見されたのが，現在よく知られている1920年ではなく，それより40年以上前であったことである。発見者は，MEPの日本人の伝道師とフランス人の宣教師であった。その後，MEPと千提寺村民の交流は約３年間続いた。この発見の背景・展開および関係者の活躍については別稿に譲りたい。

1. 近代日本における隠れキリシタンの詮索

1858年，日本と西欧列国との条約締結により，外国人の来日と開港地における定住が再び可能となった。それ以来，キリスト教系の各宣教団体は日本へ布教者を送り込んだ。その中にMEPの宣教師がいた。

主としてフランス人であったこれらのカトリックの宣教師たちは，16-17世紀のキリシタンの子孫たちと接触することを密かに願っていた。「キリシタン信徒発見」と呼ばれているベルナール・プティジャン（Bernard Petitjean，1829-1884年）と浦上山里村の隠れキリシタンの1865年３月17日の出会いはよく知られているエピソードであるが，実はその後も似たような出会いはいくつかあった。一例として，今村という久留米藩の村をあげることができる[1)]。この隠れキリシタンの村は，1867年２月末，日本人の伝道師により発見されたのである。その後，1879年から1880年には，村民が集団的にカトリック教会への改宗を決めた。

このように，MEPの宣教師が明治中期までどれほど隠れキリシタンの探索に力を注いでい

* Martin Nogueira Ramos, École française d'Extrême-Orient（フランス国立極東学院）
** さかぐち　しゅうすけ　慶應義塾大学

たのかという事実はあまり知られていない。実際，20 世紀に入る前は，カトリック信徒の大半は元の隠れキリシタンであったか，あるいはその子孫であった。それは，「純仏教」の日本人への布教は成果があまりあげられないため，改宗者の人数を増やすには，隠れキリシタンを中心に布教活動を実施することが効率的であったからだと言える。MEP の宣教師は布教方針として日本全国における隠れキリシタンの捜索に乗り出した。例えば，1882 年，テオドール・フレノー（Théodore Fraineau，1847-1911 年）という宣教師は，残存する隠れキリシタンのコミュニティを九州の全地域を巡って捜索するようプティジャンに指示された[2)]。

しかし，大阪北部の山間にある千提寺村の発見は，浦上や今村などと異なり，カトリック宣教師の努力によるものではないと思われていた。1573 年から 1585 年までの間，この地域は高山右近ジュスト（1552-1615 年）というキリシタン大名に統治されていた。高山右近の保護下において，イエズス会は徹底的に布教活動を行い，禁教令発布後の 1620 年半ばにかけても残存するキリシタンコミュニティと連絡を取り続けていたのである[3)]。1920 年 2 月，千提寺村の住民の案内を受けた藤波大超（1894-1993 年）という小学校の教師は一基のキリシタン墓を見つけた。それを機に，著名なザビエルの絵を初めとして 70 点以上のキリシタン遺物が発掘されてきた。また驚くことに，千提寺村とその近くにある下音羽村に，オラショをまだ記憶しているキリシタンの子孫がいることも判明した。周知のように，学問上幅広いインパクトのあった大発見である[4)]。

2. MEP による千提寺村の隠れキリシタンの発見

前述の千提寺地域の隠れキリシタンたちの存在が明らかになったのは 1920 年が初めてではなかった。実際，MEP の資料館には，マラン・プレシ（Marin Plessis，1844-1908 年）という宣教師のために働いていた 2 名の伝道師とこの村の隠れキリシタンとの出会いを物語る 6 ページ（folio）の報告が存在する[5)]。当時，MEP のパリ本部の評議会において日本・朝鮮・満州を代表するアンリ・アンブルステ（Henri Armbruster，1842-1896 年）が，この書簡の受取人であった。彼は 1866 年から 1874 年にかけて長崎・函館・東京で布教に関わった人物で，日本在住の宣教師に影響力を持つ中心的な人物であった。プレシはアンブルステに千提寺村に関する報告を送ることで，いつも悩まされていた予算の問題を解決しようとしたのであろう。

プレシの伝道師と隠れキリシタンの出会いは 1879 年 2 月 14 日でのことだが，報告はほぼ 1 年後の 1880 年 1 月 20 日に作成されている。報告の遅延の理由は不明であるが，プティジャン司教は 1879 年 2 月 17 日付の 2 通の手紙でこの発見について手短に言及していることから，MEP の宣教師の間に発見のことがすでに知れ渡っていたのは確かである[6)]。

3. 忘れられた発見

以上のエピソードはまるで「忘れられた発見」であると言っても過言ではなかろう。まず，プレシの報告は未整理の資料群にあるものでなく，MEP のアーキビストによって資料館の内容別目録の中に分類された。

そして，それは当該期の雑誌および書物にも言及されている。世界中のカトリック教会の布教活動を紹介する *Les Missions Catholiques* というフランスの雑誌の 1881 年号には，千提寺の発見に関して 4 頁の記事がある[7)]。語句や内容からみると，プレシの報告に基づいているものとわかる。同じく，フランシスク・マルナス（Francisque Marnas，1859–1932 年）の 1897 年の著書にプレシの報告が利用されたことは明白であるが，千提寺の村名は登場しておらず，発見自体が「大したものではない」（*sa découverte eut en réalité peu d'importance*）と述べられている[8)]。

最も驚くべきことは，1920 年の「第二の発見」の後，1923 年から千提寺地域の布教を担当したジョゼフ・ビロー（Joseph Birraux，1867–1950 年）という MEP の宣教師がプレシの報告を認識していなかったことである。しかし，1924 年のビローの報告の中には，プレシと隠れキリシタンの接触が 1878 年にあったという逸話が記されている。それによれば，大阪市内において「大阪の田舎出身」である 2 名の女性がプレシに自らの信仰を告白したが，その後，プレシはその女性たちと持続的に連絡が取れなかったという[9)]。

4. マラン・プレシと大阪地域

先行研究にプレシについての言及はほぼない。筆者の知る限り，彼の書簡・報告を扱っている論文もない[10)]。

プレシは 1844 年アンジェという西フランスの町の近くに生まれた。1864 年，MEP に入会し，3 年後の 1867 年 6 月に司祭に叙階された。同年来日し，当初は長崎地域で布教活動を行った。彼の任務先は，九州・本州・北海道・四国といくども変わった。1879 年 2 月，千提寺村でのキリシタン発見の際には，北大阪の区域を担当していた。1882 年夏，高知に送られたが，1891 年に帰国し，1894 年，MEP を脱会した。1897 年，トゥールの近くにある村の主任司祭となり，そして 1908 年，その村で死を迎えた。

MEP の宣教師による大阪の布教は 1869 年に始まった。同年，プレシとジュール・クザン（Jules Cousin，1842–1911 年）が大阪に住み着いた。日本代牧区[11)] が南と北に区分された 1876 年，プティジャン司教も長崎から大阪に移動し，1880 年までこの都市を南日本代牧区の布教の拠点とした。南日本代牧区は琵琶湖から九州にまで及んでいた。MEP は関西地域を日本文化・日本宗教の中心部と見なしていたため，布教活動を増やすことにしたのである。1879 年，フ

ランス人の修道女が大阪での活動を開始し，最初の教会が建立された。同年，京都での布教が開始された[12)]。

九州と比して関西の改宗者は少なかったが，1880 年頃，毎年大阪では 100 人前後の受洗者がいた。1879-1880 年は，今村での集団的改宗のように，日本人の信徒が急速に増加した時期であった。1 年間でほぼ 3000 人の日本人が信徒になり，1880 年のカトリック教会は 2 万人以上の改宗者を擁したのである。プレシは千提寺村の発見により，今村のように受洗者の数が飛躍的に増加するような布教活動の大きな成果を期待していたに違いない。

書簡の形態について

＊書簡は 6 ページから構成されているが，整理上の不備があり，ページ（folio）の順番に誤りがある。正しい順番は folio 1892：ページ 1，folio 1891：ページ 2，folio 1890bis：ページ 3，folio 1890：ページ 4，folio 1888：ページ 5，folio 1889：ページ 6 である。翻刻と邦訳も正しい順番に従っている。

＊プレシは手紙の欄外をよく利用した。folio 1890 および folio 1891 の欄外は注のようなものであるのに対して，folio 1888，folio 1890bis および folio 1892 の欄外は千提寺村の発見とは関係なく，布教の予算に関する文句・コメントである。folio 1889 は本文の続きである。

＊整理のため，アーキビストが付した書き込みは翻刻・邦訳していない。

＊文章・言葉の欠如を補うため，角括弧を利用した。解読の上，難解な箇所を明らかにするため，角括弧とクエスチョンマーク（例えば，[foi ?]）を利用した。フランス語の文法あるいは綴りに誤りが多い。翻刻は原文のままである。

注

1）今村の隠れキリシタンの発見については拙著 *La foi des ancêtres : chrétiens cachés et catholiques dans la société villageoise japonaise（XVIIe–XIXe siècles）*（CNRS Éditions，2019 年，341-343 頁）を参照。

2）Francisque Marnas, *La «Religion de Jésus»（Iaso ja-kyô）ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIXe siècle*（Delhomme et Briguet, 1897 年），第二巻，451 頁。和訳は，フランシスク・マルナス（久野桂一郎訳）『日本キリスト教復活史』（みずす書房，1985 年），517-518 頁。

3）千提寺地域の布教の歴史に関しては，井藤暁子「千提寺・下音羽のキリシタン信仰」『彩都（国際文化公園都市）周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』（大阪府文化財調査研究センター，1999 年，261-301 頁）を参照。

4）発見の学問的インパクトについては高木博志の研究を参照。例えば，「1920 年，茨木キリシタン遺物の発見」（松澤裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』山川出版社，2015 年，183-209 頁）。遺物の網羅的な紹介については，茨木市教育委員会『茨木のキリシタン遺物―信仰

を捧げた人びと』（茨木市教育委員会，2018 年）を参照。

5）　Archives des Missions étrangères de Paris（以下 AMEP）570，fol. 1888–1892，1880 年 1 月 20 日。

6）　AMEP 570，fol. 1691–1693，1879 年 2 月 17 日及び AMEP 570，fol. 1694–1695，1879 年 2 月 17 日。

7）　“Découverte d’anciennes chrétientés dans le Japon méridional,” *Les Missions Catholiques. Bulletin hebdomadaire illustré de l’Œuvre de la propagation de la Foi*（13 号，1881 年，8–11 頁）。オンラインでの参照が可能である：https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k105621g/f4.image.

8）　Marnas, *La «Religion de Jésus»*，第二巻，419–421 頁。

9）　*Société des Missions-Étrangères : Compte-rendu des travaux de 1924*（Séminaire des Missions-Étrangères，1925 年），12–13 頁。

10）　プレシの生涯を描くため，筆者が利用した文献は次の三点である：① AMEP 6173，Marin Plessis（matricule 951）の資料群　② IRFA の URL にある故人略歴（https://irfa.paris/missionnaire/0951-plessis-marin/）　③ プレシの故人略歴が掲載されている *La Semaine religieuse du diocèse de Tours* という雑誌（40 号，1909 年 1 月，632 頁）。

11）　代牧区もしくは代理区（使徒座代理区の略，羅：Vicarius apostolicus）とは，カトリック教会の教区（羅：dioecesis）がまだ設置されていない宣教地域に仮置きされた区画である。

12）　明治初期・中期の南日本代牧区の布教の歴史に関しては，Joseph L. Van Hecken, *Un siècle de vie catholique au Japon : 1859–1959*（The Committee of the Apostolate，1960 年）の第 1 章を参照。

［Fol. 1892 1 頁］

1880 年 1 月 20 日 大阪

親愛なる同僚へ

11 月 12 日付のお手紙が二日前に私のもとに届きました。随分と遅くなってしまいました。あなたがお話になっている 112 のミサについてはすでにお知らせくださいました。しかし，それらが死者のためであることを私に言うのをお忘れになったようです。私のことを記憶に留めておいてくださいまして大変感謝しております。これらのミサの意向は喜んで受け取らせていただきましたし，この受諾の件と感謝をあなたにお伝えしたかったのですが，事情があって遅れてしまったのです。私は大変長いあいだ，日本の南で何か異常なことが起こっているのを目にしてきました。いくつかのことが大いに私を驚かしてきたのですが，とりわけ，ミリオフィト司教［プティジャン司教］が帰られたあと，プティジャン司教とロケーニュ司教[1] のあいだで意見の相違が絶えることがありませんでした。これらのことを公然と知らされたのは，プティジャン司教が長崎に出発するときでした。何もはっきりとしたことがわからないので，誰とも長いあいだ連絡を取らないようにしました。何かに巻き込まれるのは嫌ですし，自分の手紙が偏って解釈されるのも望まないからです。**…皆のためのなんという教訓でしょう！**[2]

あなたは，大阪近辺にいまだ残っている古参のキリスト教徒について話してくださっておられます。親愛なる神父よ，この発見の日は私にとって大きな慰めの日でした。それ以来，数え切れないほどの十字架の苦難が私に降りかかってきてこう告げたのです。この人生は苦しみへと運命づけられているのであり，この地上での魂にとっての幸せとは，受難のイエスに従うこと以外にないのだと。神の御業は，かかる代償があって初めて成就するのです。

1879 年 2 月 14 日金曜日，日本の殉教祭 8 日目の翌日，私たちは神の恩寵により，大阪から 8 里離れた北の山中にある村，千提寺で古参のキリスト教徒を発見しました。私は以前から，日本の偉大な教会が残したこれら素晴らしき者たちについての興味深い情報を集めていました。ロシア正教の神父から洗礼を受けたあるキリスト教徒が，最も正確な情報を教えてくれたのです。

［Fol. 1892 欄外］

私たちがお金に関して大変当惑している原因の一つに，［関西にいる］修道女への手当の問題があります。横浜や江戸の修道女ほどに手当が出ないのは，本当にとても残念なことです。ここ大阪，神戸，京都は，仏教と神道の中心地ですから，私たちの活動は非常に重要なものであると断言します。このことを然るべき人に思い起こさせてください。さらに，プロテスタントやロシア正教徒は私たちを追い抜いています。今や修道女たちは私たちの援助を受けるべき人

たちです。彼女たちはとてもよくやっています。

［Fol. 1891 2 頁］

この良き男性*は特に，大阪の北の山間部にある村々に古参のキリスト教徒が残っていることを教えてくれました。徳川が滅びるまで，この憐れな人々は絶え間ないアラタメ［改め］に服従させられていました。しかも 7 代目，8 代目までは，人が死ぬたびに，大阪から京都に向かう道中の 6 里のところにある高槻のトノ［殿］の役人のもとに申告しに来させられていたのです。役人らは死者の出た家に赴き，遺体を目の前で埋めさせ，墓に杭を打つのですが，これは，この執拗な迫害者たちの考えでは，キリスト教徒が復活するのを阻止するためであったのでしょう。ですが，神の摂理の秘密を見てください。神の敵の意志さえも含むすべてが神の計画に従っているのです。過去の殉教者の子孫の墓に打たれたこの侮蔑の印は，主張されているように彼らの復活を妨げるのではなく，神が望むときに彼らをまさに認識させる印であったのです。そして，私は，この印によってやがて彼らが，恩寵を受けた生，永遠に生きるイエス・キリストの生に立ち返るのを望んでいるのです。日本の役人たちはこの状況を利用して迫害を受ける憐れなキリスト教徒から金をゆすり取っていたのであり，この迫害は死者，そして墓にまで及んだのです。

私は，キリスト教徒を発見した村［千提寺］の隣にある村の名前を［この良き男性に］教えてもらいました。私は二人の教理伝道師を派遣して，多くの殉教者の貴重な聖遺物のあかしとするため神様が日本のあちこちに残された親愛なる魂を探し出すことにしました。知らない山々を 4 里も旅してきたこの二人の教理伝道師は，最近信者になったばかりということで自分には勇気が欠けてはいまいかと心配しておりました。彼らは，皆の良き母であるマリア様が助けに来てくださるようにとロザリオの祈りを唱え始めました。そして，ようやく彼らは指示された村に到着しました。誰も知り合いがいないところで不安を覚えた彼らは，最初に出会った人と話すときに，古参のキリスト教徒を見つけるという目的を果たすどころか自分たちはすべてを無駄にしてしまうのではないかと心配しました。彼らは再び偉大なる聖処女に加護を求めました。そして，歩き疲れた体を休め，煙管で一服するという口実のもと，ある家に入ったのです。ところがその家の主人が高槻出身で，ちょうど教理伝道師の一人も高槻出身でしたので，すぐに知り合いになることができたのです。高槻では，それぞれの家族の住む家が隣同士だったので，二人は，野生動物しか住んでいないと思われていたこの山中で出くわした友人同士だったということになるのです。

［Fol. 1891 欄外］

*ロシア正教の神父によって改宗したキリスト教徒は自らの教義のなかでまことに誠実であり，

私は神様がいつか彼を照らしてくだされることを望んでおります。彼のおかげで発見することのできたキリスト教徒たちが［カトリック教会へ］復帰したら，彼らはすぐにこの人のために祈るでしょうし，それは私が彼らに最初に勧めることの一つになるでしょう。この魂とキリスト教の伝統を忠実に守ってきた善良な人々のためにお祈りください。その後，私は大阪で古参のキリスト教徒の二つの家族を見つけました。そのうちの一つは，十字架を小さな美しい小箱に入れてとても大切に保管しています。この二つの家族のためにも，神様が彼らを彼らの先祖がなした宗教の寛大な実践に引き戻してくださるようお祈りください。そのうちの一方の家の曾祖父は，［信仰？］のために死刑にされたのです。

［Fol. 1890bis 3 頁］

彼らは死者の埋葬の仕方について話し始めたのですが，そのとき彼らは，隣の村の千提寺で，大阪で私たちが聞いたような事実があり，12 年前の徳川幕府終焉の時もまだ実際に続いていたことを知ったのです。若い者たちはすぐに再出発しました。千提寺に着き，ある家に入ったのですが，そこには 40 歳くらいの女性が一人病気で寝込んでいました。その女性は起き上がり，大変丁重に彼らを迎え入れたので，彼らは最初驚きました。女性は，旅人が普段来ることのないこの山奥で何をするつもりなのかと尋ねました。教理伝道師の一人が「かつて多くの苦しみを経験し，今も過去の迫害に怯えているはずの気の毒な人々を慰めるために，この山に来ることにしたのです」と言いました。彼らはこの女性に，天主の宗教[3] だけが唯一良いものであり，日本の政府は迫害を止めたとも話しました。女はそれを遮って，デウスの宗教[4] は確かに人間のどんな愛情にもふさわしいものであり，すべての人間がそれに従うべきであると言ったのです。そこで教理伝道師が女性にこの宗教のことを知っているのかと尋ねました。彼女は，この宗教について教えてくれる人は誰もいなかったので自分はほとんど何も知らなかったけれど，昔は千提寺周辺の村も千提寺自体もみんなキリスト教を信じていたのだと答えたのです。そして，実際，キリスト教徒が亡くなったとき，どのように役人たちが墓に杭を打ちにやってきたのかを語り，自分の父親も何人かの知人もそうして葬られたのだと付け加えました。また，いくつかの家庭は，家にブツダン［仏壇］を持つこともなく，異教の混ざっていない純粋なキリスト教徒であったとも言いました。教理伝道師の質問に対して彼女は，祈りに関してはアヴェ・マリアしか知らないと言いました。彼女にこの立派な祈りを暗唱させたところ，あらゆる点で長崎の古参のキリスト教徒たちによる形式のものと同じであったのです。もっとも教理伝道師はそのことに気づきませんでした。というのも，長崎のキリスト教徒が発見されてから，祈りの最中に 3，4 回繰り返される「さま」という言葉が我ら［フランス人宣教師］により削除されてしまったためです。

［Fol. 1890bis 欄外］

1880 年 1 月 24 日―私の心痛をあなたに伝えるほどの勇気が私にはありません。今，評議会［南日本代牧区］が終わったところですが，去年と比べて予算は少しも増えていません。同僚たちのために自分の権利をすべて犠牲にしなければならなかったのです。ここで私は何とも言えない戸惑いを感じています。なぜなら，私たち一人一人が最も差し迫った仕事を持っていると信じているからであり，誰も私たち［大阪地方の］憐れなキリスト教徒のために犠牲を払おうとはしなかったからです。私はどんな援助もあきらめなければなりませんでした。もし，あなたが私を助けることができるのなら，私に援助の手を差し伸べてください。特に私のためにたくさん祈ってください。神が私に援助の手を差し伸べてくださるように。これが，今後私が持ちたいと願う唯一にして最もすぐれた望みです。ロケーニュ司教が戻ってこないので，プティジャン司教の許可のもと，アポロニー司教［ロケーニュ司教］抜きで評議会を行わなければなりませんでした。すべてがなんて悲しく思われることか。私たちは，可能な限りぎりぎりまで待ったのです。

［Fol. 1890 4 頁］

さて，この女性は，「Grassa mitchi mitchi tamo Maria sama on mi ni on rei wo mochi tatematsuru, on arudji sama on mi to tomoni machimas, nionin no naca ni oite wakete go cuaho imejiki nari, mata go tainai wa tattoki nite machimas etc etc.」と古式に従って暗唱し，最後に「amen sancta Maria sama」と言ったのでした。教理伝道師たちもその女性も涙を流しておりました。何世紀もの流浪の後に，新しい世代が古い世代に加わって神の栄光を共に歌うという崇高な出会いであり，これはマリア様を通してのことなのです。栄光と愛がイエス様とマリア様に永遠にありますように。いつも私たちの母として，私たちの慰め主として，私たちをイエスに導くための守り手としておられるマリア様に。私たちを救いたいと望まれ，御母とともに，御母を通してその栄光を称えられたいと願うイエス様に。この日本の教会は，まさに殉教者の女王マリア様の栄光です。今まで 2 回，彼女を通して，それぞれが大変遠くに離れた日本の諸地域で，お互いには全く交流のない人々によって，キリスト教の伝統が守られてきたのです。

この会話をしている間に，女性の夫が畑から帰ってきました。段々と暗くなってきました。この大変見事な場面に夜が不意に訪れたのでした。夫は言いました。確かに彼ら［千提寺の村人たち］は昔はキリスト教徒だったけれども，今やもうすべて忘れてしまったと。しかし，奥さんが言うには，村人たちは 40 日間の断食の習慣は今も守っていたのです。断食の時期がわからなかったので，彼らはそれを春に始めておりました。朝食べた後，そのあと一日中何も食べなかったのです。異教徒を欺くためにベントー［弁当］を畑に持って行ったのですが，それを

食べることはしませんでした。
二人の教理伝道師は，主から与えられたばかりの並外れた恩寵に幸せを感じ，もはや自制できていませんでした。泊まっていきなさいと誘われたのに彼らはそれを断ってしまったのです。これが神の許しが引き起こした我々の不幸でありました。彼らは何が起こったのかをすぐに私に伝えに行かなければならないと思ったのです。飲むことも食べることも，そして夜の闇のことも忘れ，見知らぬ山のなかに迷い込んだ彼らは恐怖を覚えることもなかったのでした。

［Fol. 1890 欄外］
千提寺周辺の至るところには，高槻のトノ［殿］として有名なジュスト高山右近の伝統が今も生き残っています。千提寺から 1 里行ったところに高山という村があり，私はそこに行きました。昔は小さな城があり，ジュスト右近が時々来ていました。城は迫害のあった時代に壊されてしまいました。現在では 60 世帯しか残っていませんが，そのうちのいくつかは自分たちがキリスト教徒の子孫であることを認めています。いつになったら［教理を］学習することに同意してもらえるのでしょうか？彼らのもとに教理書を残しておきました。

［Fol. 1888 5 頁］
そのとき，私は池田に行っておりました。つまり，ヨーロッパ列強がやみくもに結んだ条約が許す範囲内で一番遠くに行ったのです。私自身は，教理伝道師が迎えに来てくれることを期待して，山のなかを 4 里歩きました。そもそも古参のキリスト教徒の誰も怖がらせたくなかったので，教理伝道師を事前に送り出していたのです。あの険しい山を越えるとき，私の心が強く揺さぶられたことを白状いたします。これらの地域にはキリスト教徒がかつて本当に住んでいたのだと心の奥底で何かが語りかけてきたのです。これほど平穏な地域は見たことがありませんでした。しかし，そこには不安にさせるものは何もなく，すべてが穏やかな孤独を発散しているのです。この地域は，迫害から逃れ，隠れ場や逃げ場を森の動物たちと奪い合わなければならなかった憐れなキリスト教徒たちのために作られたのです。その上，この地域は魅力に満ちていて，木が生い茂る二つの山のあいだでは川が勢いよく流れ，日本では冬でも花と青々とした葉叢が，他の国，とりわけフランスでの落葉が生み出す寂しさや悲しみを消してくれるのです。唯一私に同伴したロザリオをずっとつまぐりながら，私は地上の楽園にいるような気がしていました。行きの 4 里も，帰りの 4 里も何も退屈することなく踏破し，渓流のほとりに静かに位置していた二つの村を見つけましたが，そこに仏教寺院はありませんでした。私が話しかけた人たちはとても良い人に見えましたが，私が知りたいことに何も答えてくれなかったので，彼らはキリスト教徒ではないのだと判断しました。翌日までは教理伝道師と再会できないと思いながら，池田に戻り一夜を明かしました。戻ったのは夜の 7 時 30 分，冬でしたので

真っ暗でした。山の夜に襲われた私は泊まる家に帰るまで遅くなってしまったことに気がつきませんでした。私は少し前から池田に出向き我ら聖教の教えを説き始めていたことをあなたに申し上げなければいけません。その結果，主がすべてをうまく導いてくださいました。私たちが集会を開いていた家では，もちろん自費でですが，私と教理伝道師は宿泊と食事をすることができたのです。

［Fol. 1888 欄外］

シャルルボワ[5] とクラッセ[6] の日本に関する著作の完本を私のために手に入れてはくださいませんでしょうか。日本政府は後者の方を翻訳させました。ただ高価なため，残念ながらほとんど売れていないようです。にもかかわらず，このような行動をとった政府は賞賛に値します。この本を読んだ人は皆良い印象をもったようで，いくつかの場所で，ちょうど寛大なジュストウコンドノ［右近殿］の失墜という話のところで感嘆の涙が流されるのを目にしました。右近殿の伝統はまだこんなにも生き生きと残っており，さらに彼のかつての土地にはキリスト教徒がまだいるのです。もし可能であれば，これらの著作の代金をあなたから送っていただくミサの報酬で払いますので，よろしくお願いできればと思います。

［Fol. 1889 6 頁］

夜中に教理伝道師たちが息を切らして到着したときは，どんなに驚いたことでしょう。すぐに彼らは神の恩寵に居合わせたのだと話してくれました。恩寵はまるで手を取るかのように彼らを導いたのです。このような心の高ぶりを日本では見たことがありませんでした。彼らは食事もとらずに 12 里も歩いたので，疲れ果てていましたが，喜んでもおりました。私は，彼ら二人の幸せそうな姿を見るのが，彼らの話を聞くのと同じくらい嬉しかったのでした。私はこの二人の真のキリスト教徒のなかに，心から神に帰依した二人の魂を見ました。もしこれが自分の死ぬときでしたら，私の虚しい存在を，そして私なしですべてがうまくいくことを信じて，いささかの悔いもなくヌンク・ディミティスを歌ったことでしょう。そもそも喜びを感じてはおらず，罪びとである私に，主がこのような恩寵を与えてくださったことに驚きを覚えたのです。このことには今日でも驚かされており，その後に起きたことには全く驚いておりません。ただし，そのときにすでに私は，教理伝道師の人たちがこんなに早く戻ってきてはいけないと叱りました。彼らはあそこで泊まればよかったのです。しかし，そのことを彼らが理解したのは後のことでした。実際，彼らは何度か千提寺に戻りました。この［村の］憐れな人たちは村長を怖がり，それ以上話すことをやめ，大阪に来たがらなかったのです。しかしながら，私に課せられた十字架の苦難とは，このような良き人たちを発見した時点で，私たちの手当は 1 年分で固定されており，これらの旅にかかる費用を補填するものを得ることが不可能だったとい

うことです。うんざりするほどにお金に困っているのです。それでも 3，4 回と試みようとしたのですが，何カ月分ものお金を前借りする必要がありました。このように私は極貧で首が回らない状態です。それに，それぞれの場所にキリスト教徒がたくさんいるとは思えません。彼らは方々に散り散りになっています。これは，大阪周辺の田舎を改宗させるために神の摂理が取っておいてくださった一つの手段だと私は思っています。というのも，今後世論は日ごとに私たちに好意的になっていくでしょうし，やがて，この古参のキリスト教徒たちによって，私たちは豊かな収穫を得ることができるでしょう。しかも，彼らは私が思っているよりもっとたくさんいるかもしれません。これまではお金がなくて真剣に取り組むことは不可能でした。もし，あなたが私に援助の手を差し伸べてくださるのなら，あなたは私たちに大いに貢献してくださることになるでしょう。そのあいだ，私のために祈ってください。そして，時々，よい報酬のいただけるミサの意向をお送りください。いつも同じ感謝の気持ちで受け取ります。

あなたの忠実な同僚より

M. プレシ

注

1）　ジョゼフ・ロケーニュ（Joseph Laucaigne，1838–1885 年）。当時，南日本代牧区の補佐司教であったのに対して，プティジャンは司教であった。

2）　太字の文章はプレシによるものではない。アンブルステが書き加えたものかもしれない。

3）　Religion du Maître du Ciel.

4）　Religion de Dieu.

5）　ピエール・フランソワ・ザビエル・シャルルボワ（Pierre–François–Xavier de Charlevoix，1682–1761 年）。フランス人のイエズス会士。言及されている著書は *Histoire de l'établissement, des progrès et de la décadence du christianisme dans l'Empire du Japon*（1715 年）である。

6）　ジャン・クラッセ（Jean Crasset，1618–1692 年）。クラッセもフランス人のイエズス会士。言及されている著書は *Histoire de l'Église du Japon*（1689 年）である。

[Fol. 1892 ; page 1]

Osaka 20 janvier 1880

Bien cher confrère,

Votre lettre du 12 9bre m'est arrivée il y a deux jours. Je suis en effet bien en retard avec vous. Vous m'aviez annoncé les 112 messes dont vous me parlez ; cependant vous aviez oublié de me dire qu'elles étaient pro defunctis. Je vous suis extrêmement reconnaissant du souvenir que vous conservez de moi. J'avais reçu ces intentions de Messe avec grand plaisir, je voulais vous en accuser réception et vous en remercier. Les circonstances m'ont empêché de le faire. Depuis fort longtemps je voyais qu'il se passait quelque chose d'extraordinaire au Japon méridional. Plusieurs choses m'étonnaient grandement, en particulier le désaccord qui n'a cessé d'exister entre Monseigneur Petitjean et Mgr Laucaigne, depuis le retour de Mgr de Myriophite. Je n'ai été ouvertement mis au courant de ces choses qu'au moment du départ de Mgr Petitjean pour Nagasaki. Ne sachant rien de clair, je me suis fait un devoir de ne communiquer avec personne depuis fort longtemps, ne voulant me mêler à rien, et ne voulant pas que mes lettres soient interprétées dans un sens plutôt que dans un autre … *Quelle leçon pour tous !!!*

Vous me parlez des anciens chrétiens qui subsistent encore aux environs d'Osaka. Mon très-cher père le jour de cette découverte a été un jour de grande consolation pour moi. Depuis, des croix sans nombre sont venues me dire que cette vie était vouée à la souffrance et qu'il n'y avait sur cette terre d'autre bonheur pour une âme que celui de suivre Jésus au calvaire. Les œuvres de Dieu ne se font qu'à ce prix.

C'est le 14 Février 1879 vendredi qui a suivi l'octave de nos ss Martyrs japonais, que par la grâce de Dieu nous avons découvert des anciens chrétiens à Chendaidji village située à 8 lieues d'Osaka, dans les montagnes, au nord de la ville. Depuis quelques temps je recueillais des détails intéressants sur ces admirables débris de la grande Eglise du Japon. Un chrétien baptisé par les Russes me donna les détails les plus précis.

[Marge du fol. 1892]

Une des causes de notre très-grand embarras pour l'argent, c'est l'allocation des Religieuses. Vraiment c'est bien fâcheux qu'on ne leur accorde pas à elles aussi la même allocation qu'aux religieuses de Yokohama et de Yedo. Ici à Osaka Kobé et Kioto je vous assure que nos

œuvres sont d'une importance extrême, car c'est le centre du Bouddhisme et du Shintoisme. Rappelez le donc à qui de droit. De plus protestants et russes nous dépassent. Or nos religieuses méritent qu'on les aide. Elles réussissent très bien.

[Fol. 1891 ; page 2]

Ce brave homme* me dit en particulier que dans les villages situés dans les montagnes au nord d'Osaka, il restait des anciens chrétiens. Jusqu'à la chute des Tocugawa ces pauvres gens étaient soumis à des aratame incessants. De plus jusqu'à la 7 ou 8ème génération ils étaient condamnés à chaque fois que quelqu'un mourrait à venir le déclarer aux officiers du Tono de Tacatsuki à 6 lieues d'Osaka sur la route de Kioto. Ceux-ci se rendaient à la maison du mort, faisaient enterrer le cadavre devant eux, et enfonçaient sur la tombe un pieu, qui dans la pensée de ces persécuteurs acharnés, devait empêcher les chrétiens de ressusciter. Or voyez les secrets de la Divine Providence, combien toute chose, même la volonté des ennemis de Dieu, se trouve subordonner au plan divin. Au moment voulu par Dieu, ce signe d'opprobre qu'on enfonçait sur la tombe des descendants des martyrs d'autrefois, au lieu de les empêcher de ressusciter comme on le prétendait, a été justement le signe qui les a fait reconnaître, et qui je l'espère les fera renaître bientôt à la vie de la grâce, à la vie de Jésus-Christ toujours vivant. Les officiers japonais profitaient des circonstances pour extorquer de l'argent aux pauvres chrétiens soumis à cette persécution qui poursuivait les morts jusque dans leur tombe.

On m'avait donné le nom d'un village voisin de celui ou nous avons découvert des chrétiens. J'envoyais deux catéchistes à la recherche de ces chères âmes que Dieu a conservées ici et là au Japon pour témoigner [des ?] Reliques précieuses de tant de martyrs ! Mes deux catéchistes après quatre lieues faites dans des montagnes qu'ils ne connaissaient pas, eux qui n'étaient chrétiens que depuis peu, craignirent que le courage ne leur manquât. Ils se mirent à dire le Chapelet afin que Marie notre bonne mère à tous vint à leur aide. Ils arrivèrent enfin au village indiqué. Là encore ne connaissant personne, l'inquiétude s'empara d'eux, ils craignirent qu'en parlant au premier venu, au lieu d'arranger les choses, ils ne compromissent tout. Ils se recommandent de nouveau à la très-sainte Vierge. Puis ils entrent dans une maison sous le prétexte de se reposer de la fatigue de la marche, et de fumer une pipe. Or il se trouva que le maître de la maison était originaire de Tacatsuki ; précisément l'un des catéchistes était aussi de Tacatsuki. La connaissance fut vite faite. Les maisons occupées à Tacatsuki par les familles de l'un et de l'autre étaient voisines, en sorte

qu'ils se trouvèrent connaissances et amis réunis au milieu de ces montagnes que nos catéchistes [...]

[Marge du fol. 1891]

* Le chrétien converti par les Russes est de bonne foi dans sa doctrine, j'espère que le bon Dieu l'éclairera un jour. Dès que les chrétiens qu'il a fait découvrir reviendront, ils prieront pour lui, ce sera une de mes premières recommandations. Je recommande cette âme à vos prières, et celles de ces braves gens qui ont conservé fidèlement les traditions chrétiennes. Depuis j'ai trouvé dans Osaka même deux familles d'anciens chrétiens dont l'une possède et conserve avec grand respect une croix renfermée dans un joli petit écrin. Priez aussi pour ces 2 familles que Dieu les ramène à la pratique généreuse de la Religion de leurs ancêtres. Le bisaïeul de l'une d'elle a été mis à mort pour la [foi?].

[Fol. 1890bis ; page 3]

[...] ne croyaient habitées que par les bêtes sauvages. Ils se mirent à parler de la manière d'enterrer les morts, et par là ils apprirent qu'à Chendaidji village voisin avait existé le fait dont on nous avait parlé à Osaka, et que cela se passait encore en effet à la chute des Tocugawa il y a 12 ans. Nos jeunes gens reprirent bientôt leur route. Arrivés à Chendaidji ils entrent dans une maison, ou il n'y avait qu'une femme âgée d'environ 40 ans couchée et malade. Cette femme se leva et les reçut avec beaucoup d'égards, ils en furent d'abord étonnés. La femme leur demanda ce qu'ils allaient faire dans ces montagnes où les voyageurs n'ont pas l'habitude d'aller. L'un des catéchistes dit qu'ils avaient résolu de venir dans ces montagnes pour consoler de pauvres gens qui avaient eu beaucoup à souffrir autrefois et qui devaient être encore effrayés des persécutions passées. Ils racontèrent à cette femme que la Religion du maître du ciel était la seule bonne et que le gouvernement japonais avait cessé les persécutions. Cette femme les interrompit pour leur dire que la Religion de Dieu était en effet bien digne de toutes les affections de l'homme, et que tous les hommes devraient la suivre. Les catéchistes demandèrent alors à cette femme si elle connaissait cette religion. Elle répondit que n'ayant personne pour l'en instruire elle ne savait presque plus rien, mais qu'autrefois tous les villages voisins de Chendaidji et Chendaidji lui-même étaient chrétiens. Elle raconta comment en effet à la mort des chrétiens les officiers venaient enfoncer le pieu sur la tombe, elle ajouta que son père a elle avait été enterré comme cela, ainsi que plusieurs autres personnes de sa connaissance. Elle dit aussi que plusieurs familles n'avaient pas de

Buts'dan chez elles, qu'elles étaient purement et simplement chrétiennes sans mélange de paganisme. Sur la demande des Catéchistes elle dit qu'en fait de prières, elle ne savait que l'ave Maria. Ils lui firent réciter cette admirable prière qui se trouva en tout semblable à la formule des anciens Chrétiens de Nagasaki ce que mes catéchistes ignoraient d'ailleurs parce que depuis la découverte des chrétiens de Nagasaki on a supprimé le mot sama qui se trouve répété 3 ou 4 fois dans la prière.

[Marge du fol. 1890bis]

24 janvier 1880 — Le courage me manque pour vous exprimer ma peine. Nous venons de terminer la réunion du conseil et je n'ai pas reçu une obole de plus que l'année dernière. J'ai dû sacrifier tous mes droits pour les autres confrères. Me voici dans un embarras indéfinissable, parce que chacun de nous croit avoir les œuvres les plus pressantes, personne ne voulait faire de sacrifice pour nos pauvres chrétiens, j'ai dû renoncer à tout secours. Si vous pouvez m'aider, venez moi donc en aide. Priez surtout beaucoup pour moi, afin que Dieu me vienne en aide. C'est l'unique et la meilleure espérance que je veux avoir désormais. Monseigneur Laucaigne ne revient jamais, nous avons dû sur l'autorisation de Mgr Petitjean faire le conseil sans Mgr d'Apollonie. Que tout cela est triste ! Nous avons attendu jusqu'à la dernière limite possible.

[Fol. 1890 ; page 4]

Or cette femme récita suivant l'ancienne formule : « Grassa mitchi mitchi tamo Maria sama on mi ni on rei wo mochi tatematsuru, on arudji sama on mi to tomoni machimas, nionin no nacani oite wakete go cuaho imejiki nari, mata go tainai wa tattoki nite machimas etc etc. » puis à la fin : « amen sancta Maria sama. » Les catéchistes pleuraient et la femme aussi. Sublime rencontre après plusieurs siècles d'exil, les générations nouvelles se lient aux anciennes pour chanter ensemble les gloires de Dieu, et cela par l'intermédiaire de Maria. Gloire et amour à jamais à Jésus et à Marie ; à Marie qui se montre toujours notre mère, notre consolatrice et notre protectrice pour nous conduire à Jésus ; à Jésus qui veut nous sauver et être glorifié avec et par sa mère ! Cette Eglise du Japon est vraiment la gloire de Marie reine des martyrs : voilà deux fois que par Elle les traditions chrétiennes se conservent au Japon dans des pays fort éloignés les uns des autres, et par des gens qui n'avaient aucune communication entre eux.

Pendant cette conversation le mari de la femme en question rentra des champs, il

commençait à faire noir, la nuit était venue surprendre cette scène si délicieuse. Le mari dit qu'en effet autrefois ils étaient chrétiens, mais qu'il avait tout oublié. Cependant la femme raconta qu'ils avaient conservé l'usage du jeûne pendant 40 jours. Ne sachant à quelle époque fixer ce jeûne, ils le commençaient au printemps. Ils mangent le matin puis ne mangent plus le reste du jour. Pour tromper les païens ils portent cependant le bento aux champs, mais ne le mange pas.*

Mes deux catéchistes heureux de la grâce si extraordinaire que le bon Dieu venait de leur faire, ne se possédèrent plus. Invités à coucher, ils refusèrent, ce fut là notre malheur arrivé par la permission de Dieu. Ils se figurèrent qu'ils devaient venir me raconter de suite ce qui était arrivé. Ils oublièrent le boire et le manger et l'obscurité de la nuit, perdus au milieu de ces montagnes inconnues pour eux ils ne pensèrent pas à la peur.

[Marge du fol. 1890]

* Partout dans les environs de Chendaidji la tradition du célèbre Tono de Tacatsuki, Juste Tacayama Ucon est demeurée vivante. Il y a un village à une lieu de Chendaidji du nom de Tacayama où je suis allé ; autrefois il y avait là un petit château où Juste Ucon venait quelquefois. Il a été détruit à l'époque des persécutions. Il ne reste plus là que 60 familles dont plusieurs reconnaissent descendre des chrétiens. Quand pourrais [-je ?] les faire consentir à s'instruire ? Je [leur ?] ai laissé des catéchismes.

[Fol. 1888 ; page 5]

Pendant ce temps j'étais allé à Ikeda, c'est-à-dire aussi loin que les traités conclus à l'aveugle par les puissances européennes, me permettaient d'aller. Je fis moi-même quatre lieues dans les montagnes dans l'espoir que les catéchistes viendraient à ma rencontre. Ne voulant d'ailleurs rien compromettre j'avais envoyé les catéchistes en avant. Je vous avoue qu'en franchissant ces montagnes abruptes, mon cœur se sentit tout ému. Quelque chose me disait au fond du cœur que ces pays avaient été réellement peuplés de chrétiens. Jamais je n'ai vu pays si tranquille, et pourtant rien n'y porte à la frayeur, tout y respire une douce solitude. Ce pays est fait pour les pauvres chrétiens qui devaient fuir les persécutions et disputer un asile et un refuge aux animaux des forêts. D'ailleurs ce pays est plein de charme, un torrent court entre deux montagnes au milieu des bosquets, même en hiver au Japon les fleurs et le verdoyant feuillage font disparaître le [la ?] dénudation et la tristesse que produit la chute des feuilles en d'autres pays et en particulier en France. Seul en compagnie de mon chapelet

que j'ai égrené tout le temps je me croyais dans le paradis terrestre. J'ai parcouru 4 lieues pour aller et 4 pour revenir sans le moindre ennui, j'ai rencontré deux villages tranquillement assis au bord du torrent je n'y ai pas vu de pagode, les gens auxquels je me suis adressé me paraissaient très-bons, mais ils ne répondaient à rien de ce que j'aurais voulu savoir, j'en ai conclu qu'ils n'étaient pas chrétiens. Je rentrai à Ikeda pour y passer la nuit, croyant que je ne reverrais mes catéchistes que le lendemain. Quand je rentrai il était 7 heures ½ du soir — En hiver — c'était l'obscurité la plus complète, mais surpris par la nuit dans les montagnes je ne m'aperçus de mon retard qu'à la maison où je devais coucher ; il faut vous dire que depuis quelques temps j'avais commencé à faire des voyages à Ikeda pour y prêcher Notre sainte Religion. En sorte que le bon Dieu dirigeait bien toute chose. Dans la maison ou nous faisions alors nos réunions, j'avais le logement et la nourriture pour moi et mes catéchistes, à mes frais bien entendu.

[Marge du fol. 1888]

Vous devriez bien me procurer l'ouvrage complet de Charlevoix et celui de Grasset sur le Japon. Le gouvernement japonais a fait traduire ce dernier ouvrage. Malheureusement il est peu acheté parce qu'il coûte trop cher. Malgré cela le gouvernement mérite des éloges pour un acte pareille. Tous ceux qui l'ont lu en ont reçu une bonne impression, et dans quelques endroits j'ai vu verser des larmes d'admiration précisément au sujet de la disgrâce du généreux Juste Ucondono, dont il reste encore de si vivantes traditions et qui plus est des chrétiens sur les anciennes terres. Je paierai cela avec les honoraires de Messe que vous m'enverrez, s'il vous plaît, si c'est possible.

[Fol. 1889 ; page 6]

Qu'elle ne fut pas ma surprise, quant au milieu de la nuit mes catéchistes arrivèrent tout essouflés ! De suite ils me dirent qu'ils avaient été témoins de la grâce de Dieu qui les avait conduits comme par la main. Jamais au Japon je n'avais vu émotion pareille. Ils avaient fait 12 lieues à pied sans prendre de nourriture, ils étaient épuisés mais joyeux. J'étais aussi heureux de voir leur bonheur à eux deux que d'entendre ce qu'ils me racontaient. Je voyais en eux deux vrais chrétiens deux âmes sincèrement converties à Dieu, si ç'avait été mon heure, j'aurais chanté sans le moindre regret mon *nunc dimittis*, croyant alors ma présence inutile et que tout allait marcher sans moi. Je ne me sentais pas de joie d'ailleurs, mais j'étais étonné qu'à moi pécheur comme je suis, le bon Dieu daigna faire pareille grâce. Aujourd'hui

encore j'en suis étonné, et ne m'étonne nullement de ce qui est arrivé après. Dès ce moment je fis cependant le reproche aux catéchistes d'être revenus si tôt. Ils auraient dû coucher là bas. Mais ils ne comprirent cela que plus tard. En effet plusieurs fois ils sont retournés à Chendaidji et ces pauvres gens effrayés par le maire du village ne veulent plus parler et ne veulent pas venir à Osaka. Cependant ce qui fait ma croix c'est qu'au moment de la découverte de ces braves gens, nos allocations avaient été fixées pour l'année, il m'a été impossible de rien obtenir pour couvrir les frais que m'occasionnent ces voyages. Je suis dans la gêne par-dessus la tête. J'ai voulu quand même faire trois ou quatre tentatives, pour cela il a fallu prendre de l'argent en avance sur mes mois. De sorte que je suis dans la misère jusqu'au cou. D'ailleurs je ne crois pas que le nombre de ces chrétiens soit considérable dans chaque endroit. Ils sont disséminés de côté et d'autres ; je trouve que c'est un moyen que la Divine Providence nous a conservé pour convertir la campagne des environs d'Osaka. Car désormais l'opinion nous devient chaque jour favorable, et avant peu nous recueillerons une moisson abondante au moyen de ces anciens chrétiens qui d'ailleurs peuvent être plus nombreux que je ne crois. Jusqu'ici il m'a été impossible […]

[Marge du fol. 1889]

[…] de rien entreprendre de sérieux faute d'argent. Si vous pouvez me venir en aide vous nous rendrez grand service. En attendant veuillez prier pour moi, et envoyez moi de temps en temps des intentions de messe bien rétribuées. Je les recevrai toujours avec la même reconnaissance.

Votre tout dévoué confrère　　M. Plessis